

41905

教科書文庫

4
820
41-1906
200030 2315

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

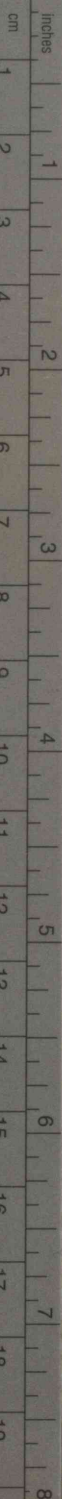


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ak9
資料室

新探漢文讀本 卷三十一



日四廿月一年九十三治明
濟定檢省部文
書科教用科文瀟校學中

秋山四郎編



新撰漢文讀本 卷之一

東京大學圖書部

金港堂書籍株式會社

新撰漢文讀本序

蒐諸家文章爲一書。如甚易。然予屢編次漢文讀本。益知其難矣。蓋其文固不可不取。純正雅馴者。其言固不可不取。垂訓寓戒者。而以此爲準。嚼蠟無味。使讀者乍生倦厭。故亦不可不交之以娛其心者。而過多則視以爲遊戲文字。至遺其主旨。文章選擇之難如此。至其編次。則更有難者。排列不可失序。難易不可躐等。事實與教之之時。不可齟齬。所謂時教是也。而全編主眼所在。則不可不終始一貫焉。譬之繪畫。雖一溪一嶽。悉適其法。安排布置不得其宜。則不足

觀。況至雲烟飛動。宛然如臨真境者。則天下名工鉅匠。而後始可能矣。予也非敢曰能之。然經營慘澹。積歲月之久。纔成此書。比之漫然編次者。不無稍可觀云。

明治三十八年十月

秋山四郎識

新撰漢文讀本卷之一目錄

- 一 句法 十五課
- 二 荒木村重
- 三 鸛
- 四 萬年龜
- 五 萬物
- 六 母鳥
- 七 奇童
- 八 虎
- 九 村童牽狼牛

- 一〇 猿救水月
- 一一 大醫住無蘭
- 一二 九年母
- 一三 大木
- 一四 牛董性度
- 一五 大砲
- 一六 中江藤樹
- 一七 榕樹
- 一八 義犬
- 一九 狗鷺
- 二〇 右府察微

- 二一 正直
- 二二 兄弟分
- 二三 雙雁挾龜
- 二四 加藤清正
- 二五 伊率符
- 二六 鱈魚
- 二七 輝虎賦詩
- 二八 龍騰
- 二九 中山信吉



新撰漢文讀本 卷之一
全漢書集林式印

目錄 終

新撰漢文讀本卷之一

一 句法

第一課

花が開く

(一) 花開ク

櫻花が盛に開きたり

(二) 櫻花盛開ニキタリ

新撰漢文讀本 卷之一
全漢書集林式印

富士山は日本第一の名山なり

(三) 富士山日本第一の名山也

横須賀、吳、佐世保、舞鶴は我が國の軍港なり。

(四) 横須賀、吳、佐世保、舞鶴、我國の軍港也。

第二課

太郎が書を読む

(一) 太郎讀書

次郎が文章を作る

(二) 次郎作文

農夫は穀物を耕作す

(三) 農夫耕作穀物

工匠は器物を製造す

(四) 工匠製造器物

第三課

友人が東京に遊ぶ

(一) 友人遊東京

歩兵が練兵場に整列す

(二) 步兵整列於練兵場

日本國民は皆忠君愛國の精神に富む

(三) 日本國民皆富忠君愛國之精神

太閤秀吉は人奴より起れり

(四) 太閤秀吉起於人奴

第四課

水が變じて水と爲る

(一) 氷變爲水

男子丁年に達すれば、則兵士と爲る。

(二) 男子達丁年則爲兵士

某を推して級長と爲す

(三) 推某爲級長

空氣を壓搾して流動體と爲す

(四) 壓搾空氣爲流動體

第五課

僕は身體強健なり

(一) 僕身體強健

我が國は氣候溫和にして、風光明媚なり。

(二) 我國氣候溫和而風光明媚也。

某生は品行端正にして、學業優等なり。

(三) 某生品行端正而學業優等也。

露國の海軍は、一は則旅順口に敗れ、一は則日本海に敗る。

(四) 露國海軍一則敗於旅順口。一則敗於日本海。

第六課

父學資を其の子に給與す。

(一) 父給與學資於其子

父其の子に學資を給與す

(二) 父給與其子學資

校長卒業證書を生徒に授與す

(三) 校長授與卒業證書於生徒

校長生徒に卒業證書を授與す

(四) 校長授與生徒卒業證書

第七課

予は猫を好まず

to

(一) 予不好猫

課業を怠ることなかれ

(二) 勿怠課業

教室に在りては、靜肅にすべし。

(三) 在教室可靜肅

猥に邸内に入るべからず。

(四) 不可猥入邸内

第八課

僕は未だ嘗て湯薬を服せず

(一) 僕未嘗服湯薬

兄弟の子は猶子の如し

(二) 兄弟之子猶子也

我れは將に東京に遊學せんとす

(三) 我將遊學東京

人は宜しく信義を守るべし

(四) 人宜守信義

吾人は當に忠孝を重んずべし

(五) 吾人當重忠孝

君盍なんぞ勉強せざる

(六) 君盍なん勉強せざる

第九課

先生生徒をして漢文を講讀せしむ

(一) 先生せんせい使し生徒せいと講讀こうどく漢文かんぶん

文法を説きて、其大意を知らしむ。

(二) 說い文法ぶんぽう令し知其大意そのたいい

賴朝範賴義經に命じて、平氏を伐たしむ。

(三) 賴朝命らいしやうめい範賴義經はんらいぎけい伐平氏はつへいし

天子侍從武官長を遣はして、出征將士を

慰問せしめ給ふ。

(四) 天子遣はな侍從武官長しじゆぶくわんぢやう慰問ゑもん出征將士しゆぢやうし

第十課

入學を請ひて許さる

(一) 請こ入學にゅうがく被許たまは

敵軍敗走し、或は殺され、或は擒にせらる。

(二) 敵軍敗走てきぐんぱいそう或見殺みころ或見擒みとら

墮落書生は、世人に嫌惡せらる。

(三) 墮落書生。爲世人所嫌惡。

勤勉の書生は、先生に愛顧せらる。

(四) 勤勉書生。愛顧乎先生。

第十一課

文字は、知らざるべからず。

(一) 文字不可不知也

我が軍未だ嘗て克たずんばあらず。

(二) 我軍未嘗不克

人の一生は、久しからずとせず。

(三) 人之一生。不爲不久。

疑は、敢て質さずんばあらず。

(四) 疑不敢不質

第十二課

予は甚だしくは釣を好まず

(一) 予不甚好釣

予甚不好釣

敵軍常には勝たず

(二) 敵軍不常勝

ト、チ、ニ、ヨリ、
ハ、心、ス、カ、ヘ、ル、
ハ、心、ス、カ、ヘ、ル、
ハ、心、ス、カ、ヘ、ル、
ハ、心、ス、カ、ヘ、ル、

敵軍常不勝

僕は盡くは既修の學科を遺忘せず

(三) 僕不盡遺忘既修學科

僕盡不遺忘既修學科

彼れは必ずしも愚ならず

(四) 彼不必愚

彼必不愚

第十三課

明治三十八年四月、始めて中學校に入る。

(一) 明治三十八年四月、始入中學校。

宮城門外に、楠公騎馬の銅像あり。

(二) 宮城門外、有楠公騎馬銅像。

日本人は、武勇を以て天下に鳴る。

(三) 日本人、以武勇鳴於天下。

先生教室に臨める時、生徒一齊に起立して禮を行ふ。

(四) 先生臨教室時、生徒一齊起立而行

禮。

第十四課

二三子、何ぞ學の成らざるを患へん。

(一) 二三子、何患乎學不成。

虎は猛しと雖も、焉ぞ能く象に敵せんや。

(二) 虎雖猛、焉能敵象哉。

長上の命は、我れ敢て従はざらんや。

(三) 長上之命、我敢不從乎。

日課終りて後遊ば、豈愉快ならずや。

(四) 日課終而後遊、豈不愉快乎。

第十五課

爰に地圖の彩色を施せる者あり

(一) 爰有地圖、施彩色者

二兔を逐ふ者は一兔をも獲ず

(二) 逐二兔者、不獲一兔

某氏得たる所の金を學校に寄附す

(三) 某氏寄附所得金於學校

正成帝の嘗て賜ひし所の寶刀を以て、正行に授けて訣別す。

T. Sa ka i.

(四) 正成以帝所嘗賜寶刀授正行訣別。

右所示十五課漢文句法大要也。諸子宜理會之。然後講讀左諸篇。

二 荒木村重

村重素より雄豪を以て聞ゆ。部兵皆驍なり。義昭の變に、首として信長に應じ、迎へて大津に謁す。面貌甚だ偉なり。會、饅頭を獻ずる者あり、信長佩刀を抜き、饅頭を鋒に貫き、以て村重に啗はしむ。村重進み、口を開きて之を受く。信長

笑ひて曰く、好男子、攝津十三郡、汝が之を剪取するに任す。

村重素以雄豪聞。部兵皆驍。義昭之變。首應信長。迎謁于大津。面貌甚偉。會有獻饅頭者。信長拔佩刀。貫饅頭于鋒。以啗村重。村重進。開口受之。信長笑曰。好男子。攝津十三郡。任汝剪取之。 頼山陽

三 鶴

獨逸の村落に高塔あり。鶴其上に巢く。ひ、三雛

を乳す。鶴朝に出て、暮に歸り、以て常と爲す。
一日塔火あり、鶴烟を望みて還り、空中を盤旋
すること霎時、忽ち下りて一雛を銜み、他處に
移す。再び來り又一雛を銜み去る。三たび來れ
ば則烟燄鬱勃たり。鶴衝きて入り、更に一雛を
索むれども得ず。遂に自ら焚死せりと云ふ。

獨逸村落有高塔。鶴巢其上。乳三雛。鶴
朝出暮歸。以爲常。一日塔火。鶴望烟而
還。盤旋空中。霎時。忽下銜一雛。移他處。



鶴

再來又銜一
雛去。三來則
煙燄鬱勃。鶴
衝而入。更索
一雛。不得。遂
自焚死云。

四 萬年龜

萬年龜といふものあり、某大に喜び、價を論ぜ
ずして之を買ふ。越えて三日、遂に斃る。某憤然

として往きて之を責む。賣りし者從容として
曰、是れ萬年の期已に盡きたるのみ。
有萬年龜者。某大喜。不論價買之。越三
日遂斃。某憤然往責之。賣者從容曰。是
萬年期已盡耳。信夫恕軒

五 萬物

世界の萬物は、分ちて二大宗と爲す。一を無機
物と爲し、一を有機物と爲す。無機物は、礦物
是れなり。有機物は、又分ちて二宗と爲す。一は則

知覺なくして運動すること能はざる者、植物
是れなり。一は則知覺ありて能く運動する者、
動物是れなり。

世界萬物分爲二大宗。一爲無機物。一
爲有機物。無機物者。礦物是也。有機物
又分爲二宗。一則無知覺而不能運動
者。植物是也。一則有知覺而能運動者。
動物是也。蒙學動物教科書

六 母鳥

母烏衆兒を聚め、相謂ひて曰く、汝等畏る、所は何者ぞ。兒同聲に對へて曰く、巧射尤も畏るべし。母曰く、否なく、蓋名手の放つ所は、其の箭正し、故に之を避くること易し、拙射に至りては、則左右前後定方なし、箭の來る、度るべからず、此れ尤も畏るべきなり。

母烏衆兒。相謂曰。汝等所畏何者。兒同聲對曰。巧射尤可畏。母曰。否否。蓋名手所放。其箭正。故避之易。至於拙射。則

左右前後。無定方。箭之來。不可度。此尤可畏也。

七 奇童

一幼兒あり、機敏絶倫にして、人難ずること能はず。或る人之を聞きて曰く、吾れ其れ之を試みんと。因りて問ひて曰く、太平洋は幾滴の水より成るか。兒答へて曰く、是れ知り難からず、但し大陸の萬川、日夜奔注して舍まず、子且つ之を抑めよ、我れ便ち當に之を計るべきのみ。

有一幼兒機敏絕倫。人不能難。或聞之曰。吾其試之。因問曰。太平洋成於幾滴之水乎。兒答曰。是不難知。但大陸萬川。日夜奔注。不舍。子且抑之。我便當計之耳。

八 虎

蘇門答立の俗、甘んじて虎の害を受けて、之を敢て除くことなし。毎に謂ふ、祖宗の魂、虎の體に附す、故に之を殺す者は、則ち子孫昌へずと。是

を以て虎患日々に増し、寧處することあるなし。嘗て聞く、彼處は獼猴甚だ多く、一たび虎の來るを見れば、即ち奔りて樹に上る。虎樹下に至り、目を睜り咆哮す。衆猴驚きて落つること果の如しと。

蘇門答立之俗、甘受虎害而莫之敢除。每謂祖宗之魂、附于虎體。故殺之者、則子孫不昌。以是虎患日增。莫或寧處。嘗聞彼處獼猴甚多。一見虎來、即奔上樹。

虎至樹下。睜目咆哮。衆猴驚落。如果。博

物新編

九 村童牽狼牛

村童狼牛を牽きて、細徑を過ぎ、一貴人に遇ふ、蓋田主なり。童偶帽を脱することを忘る。貴人愠りて曰く、汝何ぞ無禮なる。曰く、牛狼ること甚だし、閣下、幸に楯衡を持たれよ、奴便ち當に帽を脱して至敬を表すべきのみ。

村童牽狼牛。過細徑。遇一貴人。蓋田主

也。童偶忘脱帽。貴人愠曰。汝何無禮也。曰。牛狼甚。閣下幸持楯衡。奴便當脱帽。表至敬已。

一〇 猿救水月

印度に巨樹あり、尼俱律と名づく。一夜群猿樹下に聚る。傍に深井あり、月影適水に在り、老猿俯して視、驚きて曰く、月公井に没す、盍ぞ下りて之を救はざる。皆之を難んず。老猿曰く、是れ難からざるなり、我れ其れ之を試みんと。因り

て手にて一枝を援りて曰く、汝等交互其の尾
を持って群猿之れに従ひ、累々として連珠の状
を成す。將に水面に達せんとするるとき、枝忽ち
折れ、猿悉く井に墮ちて死す。

印度有巨樹名尼俱律。一夜群猿聚於
樹下。傍有深井。月影適在水。老猿俯視。
驚曰。月公沒井。盍下救之。皆難之。老猿
曰。是不難也。我其試之。因手援一枝曰。
汝等交互持其尾。群猿從之。累累成連。

珠狀。將達水面。枝忽折。猿悉墮井而死。

一 大醫住無蘭

大醫住無蘭疾病なり、衆醫來りて枕を護る。病
間住衆に謂ひて曰く、吾が死近きに在り、但し
吾れは我が病を憂へずして、他人の疾を憂ふ、
幸に三名醫を得たり、以て後人に遺すべし。衆
争ひて其の名を問ふ、蓋各其の選に中らんこ
とを期するなり。住曰く、他に非ず、其の第一を
淨潔博士と爲し、第二を節欲先生と爲し、第三

を運動國手と爲すと。衆醫相視て茫然たり。

大醫住無蘭疾病。衆醫來護枕。病間住
謂衆曰。吾死在近。但吾不憂我病。而憂
他人疾。幸得三名醫。可以遺後人。衆爭
問其名。蓋各期中其選也。住曰。非他。其
第一爲淨潔博士。第二爲節欲先生。第
三爲運動國手。衆醫相視茫然。
土屋鳳洲

一九年母

大方推量

香柑俗稱九年母。使僮餉人。僮謂橘也。
金橘也。我已食之。未嘗此味。算數九個。
所以有斯名。輒懷其二。往告曰。聊獻七
年母。他主婦解苞。莞爾笑曰。嘻。九年母
耶。僮忽探懷。謝曰。二年母在於此。
軒

一三 大木

米國白根畑山脈一帶。深林蒼鬱。夙名
於大木。其木似杉。蓋稱世界第一。落落



排雲霄相傳經二千
 年其尤大者直徑四
 十尺高及四百尺嘗
 開孔道於林中而巨

幹盤根連結層累不可伐除乃穿幹通
 路車馬往來不少礙云

一四 牛董性度

牛董性度溫和遇意外之事不動聲色
 一日牛董出書室歸則見其所愛之狗
 蹴倒火燭案上堆紙悉成灰燼蓋積年
 所刻苦測算者也牛董既老知不可復
 再痛惜不措然不加一毆打特睨狗曰

汝作害于人。而汝不自知乎。嗚呼。

中村敬字

一五 大砲

大砲以長大稱。梅谷則名於肥大。皆角
觚之雄者。一日二人散步于橫濱市街。
衆爭出觀之。莫不驚嘆。一歐人偶來。亦
注視。乍進比肩。梅谷稍高。頗有得色。又
進比大砲。低甚。恰似兒童倚壯夫。歐人
竊苦笑。顧望大砲。匆匆趨去。

一六 中江藤樹

中江藤樹恒患痰咳。每疾累數枕而臥。
從愈去之。病革時。其母問之。藤樹懼母
之憂。力疾手自去一枕。曰。小愈。母曰。然
則不日必起。悅而出。藤樹則死矣。川田
琴卿歎曰。先生之於孝。至死不變。可謂
至孝矣。角田簡

一七 榕樹

歎

樹中奇者。爲榕樹。其枝下垂至地。再生根成幹。印度多是樹。其最大者。幹大者三百五十。小者三千。延長三町餘。樹陰可容七千人。其始惟一幹耳。其枝漸次下垂。多歷年所。一株遂成一林。土人以爲神聖。崇敬之。以樹陰充行宗教儀式之場。重野成齋

一八 義犬

有少年。牽赤黑兩犬來。遂入之海中。兩犬爭先游泳。有間。回頭望陸而還。赤常在先。黑則似稍疲者。赤屢顧後而待。如將扶之者。已近岸。赤一躍而上。黑則不能。於是赤再投海。欲援黑上岸。高赤又率黑。遍索坦處。纔得上陸。赤黑相依。掉尾而去。觀者皆歎其友誼。

一九 狗鷺

鷺居海邊者名狗鷺不能自沒水獲魚常立巖上望之偶見鷺銜魚而揚則徐追之鷺輒避而高揚隨追隨高及其高極急逼之鷺竟放魚鷺即承之於空中云蓋鷺之初徐追鷺者欲其高揚也欲高揚者欲便於空中攫放魚也

二〇 右府察微

信長嘗自剪十指甲使侍臣收其剪餘

レニ、レ

侍臣搜索左右久而不去信長問汝何故不退答曰剪餘既得九而未見其一信長爲起拂兩袖則爪片墜者一信長大賞之曰人之用心當如此緻密大槻磐

二一 正直

甲乙村人爭畔不決甲謂乙曰聞本日官遣吏來視幸就乞裁判乙曰可但余今日刈稻忙甚子獨往并陳余言後得

一報則足矣。甲於是自往訟理。擬兩造。既得決歸。至曰。曲在我。

三三 兄弟分

一紳士散步郊外。乞丐進曰。兄弟分。少垂憐。紳士顧笑曰。吾兄弟無乞丐者。丐曰。四海之內。皆兄弟也。紳士領曰。然。探懷投文久一枚。丐顰蹙曰。吝矣。紳士曰。四海之內。皆兄弟也。汝盍遍就四海兄弟。

各乞一錢。汝富必倍於我輩矣。

三三 雙雁挾龜

池上有雙雁。與龜相狎。

會天大旱。池水漸涸。雙雁相謂曰。龜兄。困可知。盍相救。乃往弔曰。



早魃爲虐。池心將裂。兄之窮厄。果爲何
 若。幸我儕有翼。四翼挾一甲。徙之水涯。
 何足爲難。龜頓首謝其厚誼。已而雁銜
 枚示龜曰。君亦銜此。但途上勿發一語。
 開口則失身。於是雙雁挾龜。鼓翼飛揚。
 天風吹送。冷然快甚。途過村落。兒童仰
 觀。嘲龜無能。龜忿恚。不覺一喝。忽墜石
 上。甲破而死。土屋鳳洲

二四 加藤清正

清正航海歸肥後也。駕大艦呼天地丸
 者而西。艙間日讀論語。以朱墨自句。清
 正有所愛。胡孫遊戲不離側。偶起之廁。
 胡孫闚其亡。竊把朱筆。縱橫塗抹卷上。
 清正復坐視之。笑曰。汝亦有志聖人之
 道乎。復研朱墨。句而不輟。大槻磐溪

二五 伊率符

希臘人伊率符。初傭耕在田。有一旅客過。指前村問曰。赴彼處要幾時間。伊答曰。第行矣。客慍曰。吾唯問其時間耳。曰。第行矣。客怒罵而去。伊視其行步。曰。二時間而可也。客顧詰之。伊曰。不知汝行步遲速。安得計所須之時間。

二六 鰐魚

南米熱地多鰐魚。人畜動輒被害。而其

捕猿尤巧。云鰐往林下水濱。潛身現頭。一猿偶見。便報之。群猿來折林樹。投之。鰐爲不知。以任其所爲。猿初怪不敢近。後漸近。漸狎。已而群猿手相繫。累如連鎖。終撫鰐頭。鰐忽開大口吞之。群猿驚散。

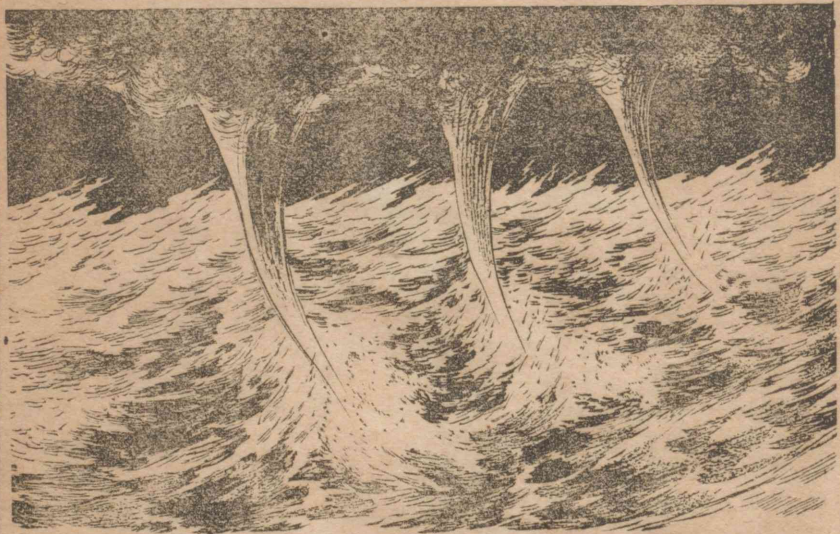
二七 輝虎賦詩

上杉輝虎勇略絕人。善用兵。每臨陣。馳

行數次。隊伍乃定。雅好藝文。其征能州。適值九月十三夜。會諸將。讌飲。賦詩曰。霜滿軍營。秋氣清。數行過雁。月三更。越山并得能州景。遮莫家鄉憶遠征。其風流如此。青山延于

二八 龍騰

空氣流動。激蕩旋轉。為渦。謂之龍騰。世俗所謂龍卷。其實則旋風也。或起於陸。



龍騰

或發於海。其於海。則捲萬斛潮。直接雲天。望之如建一大圓柱。時或有見數大圓柱。行動不止。已圓柱離海而昇。俗謂之龍上。

畜
人畜
ナカク多ク
ナカク多ク
ナカク多ク

天。至其起於陸者。則發家屋。拔樹木。人畜倒。土石飛。嘗起於上野國邑樂郡。捲長柄明神祠前。一大石華表而去。不知其所之云。

二九 中山信吉

德川賴房多子。而未置嗣。大猷公命中山備前守信吉。擇諸子。信吉至水戶。見諸公子。察其賢否。諸公子皆修飾出見。

公子光因甫六歲。見信吉呼翁。直把盤上打錫賜之。信吉大喜。抱光因曰。眞我嗣君也。乃還白之。遂立爲世子。卽義公也。世稱其識鑒。岡田僑

Tok

新撰漢文讀本

卷之一

金港堂書籍株式會社

新撰漢文讀本卷之一終

酒井利男

第 I. II

明治三十八年十一月二日印
明治三十八年十一月五日發
明治三十九年一月十五日訂正再版印刷
明治三十九年一月十八日發行

新撰漢文讀本

定價卷一 金拾八錢
價卷二

明治三十三年九月廿四日
文中部省檢定書
中學校漢文教科用書

著作權所有

著作者

秋山四郎

東京市赤阪區赤阪表三丁目十五番地

金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

右社長

原亮三郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十番地

帝國印刷株式會社

東京市京橋區築地三丁目十五番地

金港堂書籍株式會社

金港堂書籍株式會社支店

各府縣特約販賣所

日本橋區本町三丁目十七番地

大阪市東區北久太郎町四丁目十五番地

發賣所
發賣所
賣捌所

